

村落社会研究会創立の頃

有 賀 喜左衛門

村研がどんな経過で創立されたかをこの辺で思い出しておくことは大切であろう。私は身辺の事情で昭和四〇年頃以来村研の大会に出られなくなり、非常に残念に思っている。大会の折に若い人々と話合う機会もないと思うので、昔話をして村研の原点がどんなものであったか伝える責任もあると思っている。

昭和二七年に第二五回日本社会学会大会が東京大学・東京教育大学で開かれた際、村落研究に関心を持つ人々の間に村落研究の学会をほしいという話を持ちあがった。その年の十二月二〇日に発起人の会合をして、仮称村落研究会の発足をきめた。発起人の名前は服部治則、川越淳二、米林富男、武田良三、内藤莞爾、中島竜太郎、中野卓、福武直、小山隆、山本登、甲田和衛、秋葉隆、有賀喜左衛門、木原健太郎、喜多野清一、関清秀、鈴木栄太郎であった。

それをみれば農村社会学の人々が多いということになるが、この時村落研究をそういう狭い専門に限らないで、できるだけ異なる専

門の人々——むしろ社会学以外の人々——と一緒に総合的な共同研究をすることを目標にしようということが熱心に語られた。

戦後の日本では期せずして学際的な連絡をとうとする運動が盛りあがった。その時に「学際的」という言葉はもちろんなかったが、戦前のように何かの専門だけで固まるということとはなくなり始めてきた。それは注目すべきことであった。

日本常民文化研究所の創立者である渋沢敬三は戦前からこういう試みをしていたが、彼は昭和二二年に六学会の連合を作り、会長におされた。その時の六学会というのは言語、人類、考古、民族、民俗、社会の六学会であり、日本の学界にとって画期的なことであり、これは毎年共同調査と研究発表大会と年報刊行とを行なった。昭和二三年に地理と宗教との二学会が加入し、その一、二年あと心理学会が加わり九学会となった。そのあとで東洋音楽学会が加わり、考古学会が脱退して、現在は九学会となっている。また別に昭和二三年には東大法学部尾高朝雄がリーダーとなり、日本文科学会が発足し、封建制や封建遺制に関する共同の研究発表会を開いたあと、二五年頃から数年に亘って「社会的緊張」に関する大きな共同調査を行なったことも多くの専門家による共同調査として注目すべきものであった。

こういう情勢の中で多方面の人々による共同研究を目標とする村落研究の学会を作ろうとすることは極めて当然な成行きであり、積極的な姿勢を持ったことは注目すべきである。だから発起人によって各地方の、社会学以外の専門の人々にも呼びかけが行われた。そ

して学会の樹立の準備がすめられた。会則は必要であったが、多くの人々の希望で会則は大筋だけのものであり、むしろ会員の協力を中心にいくという気構えが強かった。当時まとめられた会則は次のようなものであった。

村落社会研究会会則

A 名称 本会を村落社会研究会と称す。

B 趣旨 本会は村落社会の研究について専門各分野の連繋を密にし、その研究の発展を期する。

C 事業

1 研究会

a 毎年共同の課題を定め、年一回課題研究に関する共同討論会を開く。

b 毎年の討論大会の際翌年の課題を決定し、各自で調査研究又は共同調査を行い、次年度の討論大会において発表し、論議する。

c 共同討論大会以外に各地において調査し、研究会を頻繁に開き、又各地会員の連絡を計り、研究活動をさかんにする。

2 出版

本会は機関誌として年報を出版する。

(下略)

3 共同調査

会員相互の共同調査を行うと共に海外の学者との連絡を密にし、併せて共同調査をも企てたい。

D 会員及会務

1 会員は村落社会研究会に関心を持ち、共同研究活動を希望する諸科学分野の研究者も以てする。

2 会費はさしあたり入会費百円、通信費百円とする。

3 本会に事務局をおく。

村研運営のために昭和二八年度に次の委員を定めた。

課題委員(有賀、喜多野、森住、甲田、塚本)

年報委員(野尻、武田、福武)

文献委員(内山、森岡)

通信連絡委員(塚本、北川、松原)

事務委員(有賀、中野、森岡)

事務委員は始めに事務局を担当した東京教育大学のメンバーである。村研の大会を討論大会と称したことに注目してほしい。新しい学会は会員の役職からはなれた自由な討論によって成立することが目標とされた。そして昭和二八年の第一回大会における課題は課題委員によって「農地改革の村落社会に及ぼした影響」が出され、「研究通信」によって会員の賛否を計った後決定された。

それに先立って第一回の討論大会をどこで開くべきかが大きな問題となった。またどんな形の集會を持つべきかということもやはり大きな問題であり、その上に最初の大会を成功させることは村研のその後の運命にとっても重大な影響を持つと考えられた。もし失敗するとあとが続かなくなる怖れがあったからである。

当時東北大学においては中村吉治の研究室(日本経済史)と木下

彰の研究室（農業経済学）には村落研究の人材がそろっていたし、両者とも会の結成に対して積極的であったので、誰れの見るところでも、東北大学において第一回の大会をやるのが一番いいと思われた。この考えは中村と木下に通じたので、彼らは第一回の大会を仙台で開くことを喜んで引きうけてくれることになった。

こうして第一回の村研の討論大会は昭和二十八年一〇月二〇日東北大学農学研究部講堂において開催され、会員約七〇名の参加を得て、極めて熱の高いものとなった。研究発表は井森睦平、大山彦一の司会、討論は小山隆の司会のもとに行われた。当日の研究発表は次のようなものであった。

- 1 岩手県大野郡晴山家を中心として 木下 彰（東北大）
菅野俊作（東北大）
- 2 岩手県煙山村調査 中村吉治（東北大）
島田 隆（東北大）
- 3 農地改革後の自作農 森住五郎（農業綜研）
- 4 群馬県の一山村の村落構造と農地改革 小池善吉（群馬大）
- 5 農地改革による社会移動
— 近畿水田村の一事例 — 山本 登（大阪市大）
西田春彦（和歌山大）
- 6 農地改革と村落構造

— 未墾地買収の問題を中心として — 高倉又二（宮崎大）
通例の学会より発表者一人の持時間が多く、活潑な討論もあって、充実したものとなったことは参加者を十分に満足させた。

討論終了後に協議会が持たれ、村研の運営に関する諸問題が協議されたが、そのあと続いて行われた懇親会は爆発するように談論風発となり、第一回の討論大会の成功にすべての人々は感激し、大きな自信を持って、お互に喜び合った。喜びの渦は大きくなるばかりで閉会もできない始末であった。ついに閉会の辞もなかった。それはあたかも閉じることのないことを象徴したかのようであった。そしてこれがその後の村研大会の慣例となった。これとともに中村と木下の研究室の人々の多大な助力は忘れ得ないことであった。

今日より返えてみれば、最初に意図したように諸科学の分野の専門家が入会するということは思ったほどに実現しなかった。少数でも力のある人々がいたので充実していた。しかし一般にみれば専門の学会に属していたので、学際的な学会を構成することに必ずしも熱心ではなかった。このことは日本ばかりのことかどうかは知らないが、広い視野を持つことは大切であって、実際にはむずかしいことである。私は村研のこれからの方向にはこういう要素がないと研究を小さなものにすると思わざるを得ない。社会とは文化の裏返しのようなものであるから、文化を理解しない研究には深みは出ないことを知って頂きたい。（一九七五年一月一六日稿）